

現代リトアニアにおける政党政治

—— 権力闘争と世代交代 ——

中 井 遼

1. はじめに 本稿の概要および目的

本稿はリトアニアの現代政治とりわけ政党政治の変遷に着目し、諸研究での蓄積を整理しつつその変動を体系的に再構築して示すことを目的とする。よって本稿は仮説検証型の論文ではなくレビュー論文の形態をとる。しかし本稿は事例への理解・整理に資することだけを目的とするのではなく、一方で豊富なファクトを記述し、本邦はおろか英語文献においても容易には見いだせない新事実を織り交ぜることによって一定の新規性を担うものである。

リトアニア政党政治を概観すると、多くの政党や連合が現れては消えているように見えているが、その内実を記述し分析した本稿からは、主要なアクターとして十数名の政治エリートの固有名詞が変わらないものとして存在していることがわかる。90年代は独立政治のエリート間による権力闘争が目立つが、2000年代に入ってから、新興政治エリートが政党政治に挑戦・参入し、新旧エリート間の権力闘争の側面も見受けられる。また、目に付く変化として、既存エスタブリッシュメント政党内における世代交代が見られていることが示される。

2. 既存研究の整理および記述的分析 によるリトアニア一国研究の意義

政治学・比較政治学の分野でリトアニアを扱ったものをここですべて列挙することは難しい。EU内比較のような、ややラージ N 研究的な傾

向をもつもの、またはバルト諸国の国民統合やエスニシティ、外交政策を対象とした論文となればその業績は膨大であり、筆者の能力を超えるが、リトアニアの特に政党システムを題材に扱ったものとしてはベッタイ、クロイツァー、シック、イシヤマ、ブドリテ、ローズとムンロのように比較政治学者としてバルト諸国比較を主とするもの¹や、ラネ、クリツクス、クルパヴィチウス、ジュヴァレウスカス、ユルキナス、ラモナイテ、ノヴァゴルツキエネ、ドゥヴォルドのようなリトアニア政治研究者²、そしてやや古典的・歴史的なものとしてリーベン、スミスがあげられる³。東欧政党システム内部での比較でリトアニアまで考慮にいたれたものとなれば、その業績は多いが代表的なものとしては、キツェルト、グジマワ＝ブッセ、ホワイトフィールド、ルイ、メレシェヴィチ、ブガイスキ、ミューラー＝ロンメルらの名をあげることができるだろう⁴。しかしこれらの著作は、最近のものでも2000年前半ごろまでの状況を分析したものが多く、筆者を含めてこの地域の政党政治を観測しようとするものは近年の状況を自ら整理把握しなければならない。またこれらの業績のかなり多くには、何年に某党が成立した、某党と某党が合併した、あるいは分離したという情報はあっても、「なぜ」「どのようなインセンティブで」そのような行動があらわれたのかの記述が欠けていることが多い。それはいずれ多くのジャーナルや業績で論考の対象となるであろうが、現在の段階で整理をおこなうことには一定の価値がある。特に近年の事象については、Economist Intelligence Unit や Freedom House が発行している各年レポート（それぞれ *Country Profile*, *Nation in Transit*）、あるいは、*European Journal of Political Research* 誌においてクルパヴィチウスが毎年出している政治現象レポート⁵など

によってフォローすることが可能であるが、いかんせん毎年ごとに区切られた情報であり継続性がない。これらの情報源から政党システムや議会内動向の情報を抜き出して整理し、かつ毎年ごとに区切られた情報をつなぎ併せて再構築することは重要な価値がある。

また、選挙研究の分野でもリトアニアは並立制を採用している数少ない民主主義国であるため、フェッララとヘッロンの業績のような最先端の研究ではリトアニアの事例がデータのの一つとして組み込まれている。*Electoral Studies* 誌で不定期に論じられる選挙分析は、本地域の選挙政党をめぐるファクトを扱いつつ政治学の水準から論じたもっとも信頼性の高い研究であろう⁶。しかし、理論的な関心と強く結ぶつけられた研究の中には時に現実政治に関する事実誤認などがそのままのこされていることがあり、事例と歴史的展開に対する詳細な理解が必要とされるのである⁷。

本邦におけるリトアニア政治研究に目を移せば、かならずしもその数は多くない。畑中は本邦におけるリトアニア研究のバイオニアであり、チェパイティスとの共著でだした業績がやや政治的事象を扱っているが、その手法・フィールドは文化人類学である。リトアニア語学者村田訳によるアダムクス大統領の著作はリトアニアのリアルポリティークを読ませてくれるが、畑中・チェパイティスの業績も含めてどちらも政策担当者の回顧録の側面が強く、貴重な情報を含みつつも情報や評価における体系的なバイアスの可能性が潜み、また理論研究に直接つながるものとは言い難い。現代リトアニアの社会現象や政策 이슈 を扱ったものとしては吉野の業績群があるが、経済的現象が論考の主眼となっている。また、佐藤の業績もいくぶん政治現象に言及しているとはいえ、社会的現象あるいは文化的要素の論考が中心であった⁸。

とはいえ比較政治学の観点から、一事例としてリトアニアを扱うものは存在する。仙石は家族・年金・労働といった広義の政治経済学のフィールドにおける諸国との比較研究の中でリトアニアを含めている⁹。塩川もまた旧ソ連構成国の統合政策や言語政策の比較の視座からリトアニアを扱っている¹⁰。だがこれらは政党システムや選挙を直接の題材とするものではない。その中で、松里のリトアニア内政研究は優れたものの一つであるが、

地方制度の改組に重点が置かれている¹¹。近年で新しくリトアニアの政党政治を正面から理論的に論じようと試みたのは、大中によるバルト諸国の政党政治の整理であろう¹²。しかしこれは（編集上の要請と解されるが）数ページのもののみとなっており、やはり2000年代前半までの論考でとまってしまう。本邦では政党システムの分野がまだ研究上の空白域として存在している。ここにも本稿の貢献する価値がある。

いくつもの国々をケーススタディの対象とし、また理論的検討も重視する多くの比較政治学者関係者にとって、各国の政治的現象としてもっとも見えにくい事象のひとつは、けっして指標化されることのない、剥き出しの権力闘争の側面である。比較という営みの一つの究極的（かつ極端な）目的が「固有名詞を排除した」¹³ 比較であるとするならば、個人名や地名・企業名および瑣末な政党名の飛び交う、権力闘争としての政党政治史はもっとも観察しにくく、また情報の得にくい事象であろう。それはすなわち変数コントロールの困難さにもつながる。しかし自らの仮説を論じたいとするときに、各国の議会の中における権力闘争の要素が（独立変数に設定するにせよ統制変数に設定するにせよ）きわめて重要であると予想されているにもかかわらず、その観察に要するリソースとエネルギーを前にして仮説の論証を放棄するのは本末転倒である。ポスト共産主義諸国における政党システムや政党リネージ機能において、カリスマ的個人の果たす役割は無視できないほどに重要であることはしばしば指摘されていることからである¹⁴。本稿は、そのような筆者本人のものを含めた研究上の要請に応えることもまた一つの目的として、現代リトアニア政党政治の史的展開について整理と考察を試みるものである。

以下からは、総選挙ごとに節を区切り、各選挙の結果に関する概要を簡単に示しつつ、各党の状況を説明し、またその後の内閣運営およびその期間における合従連衡・分離結合について、政治家個人レベルにまで落としこんだ説明を行う。とりわけ90年代には独立運動にかかわったもろもろの主要政治家が率いる各党派間の衝突が見受けられる。同じ独立運動を率い、また3.11独立回復決議の署名者（シグナタライ¹⁵）として席を同じにし、名声を共有しながらも、合従連衡を繰り返すエリー

トたちの権力闘争として政党政治の展開を描くことが可能であることを示す。2000年代に入ってから、新しいカリスマ的リーダーたちが自分自身の政党を組織・結成して、既存エリート（および既存政党）との権力闘争に参入していく構図を見て取ることができるだろう。すなわち、諸政党の勃興や衰退が目立つ一方で、その内実には十数名の政治エリートの固有名詞が変わらないものとして存在している事が示される。しかしそれは根拠なき闘争ではなく、おのおのの政治エリートが再選可能性という議員の合理性に基づいて行った闘争でもあることが示唆される。なお、繰り返し登場する政治エリートについては、初出時にアルファベット表記を付記することで重要アクターであることのサインとする。それを含めた主要な登場人物については巻末に一覧を記したので適宜参考にされたい¹⁶。

3. リトアニア政党政治史

3.1 90年3月独立宣言後

リトアニアを含むバルト諸国では1988年ごろから独立を具体的に要求する団体や市民運動の登場が見られ始めていた。1989年の12月にリトアニア共産党が改革派リーダーのブラザウスカス (Algirdas M. Brazauskas) に率いられ、ソ連共産党からの組織的独立を決議したあとに、1990年2月にソ連体制下において初めての自由選挙が実施された。選挙後に召集された議会（セイマス：当時はまだリトアニア最高会議）の大勢は民主化および独立運動たるサーユディス (*Sąjūdis*) メンバーによって占められており、3月11日、リトアニアは独立回復宣言を發布する。サーユディスは民族主義者ランズベルギス (Vytautas Landsbergis) によって率いられており、彼は議会議長として暫定的な国家元首の座にもついた。なお、体制側たる共産党員の多くも改革派であったために、共産党議員でありながらサーユディスメンバーである者も多数いた。本議会で選出された初代首相プルンスキエネ (Kazimira Prunskienė) もその一人である。

これに対してソ連政府は共産党施設の掌握や送

油停止という制裁措置をとる。リトアニア暫定政府が6月に即時の独立を取り下げ、ゆるやかな交渉に入ることでいくつかの経済制裁は緩和されたが、軍事的介入の可能性という緊張は消えず、また送油停止の影響を受けた90年末の冬は国民経済を疲弊させた。首相プルンスキエネは実務派だったが、民族派中心の議会から苛烈な批判をうけ、交渉が空転し首相を辞任してしまう。その首相退任に伴う権力の間隙について¹⁷、91年1月13日にはソ連からの軍事介入を受けた（血の日曜日事件、単にその日付をとって *Sausio 13* とも呼ばれる）。後任首相シメナス¹⁸が行方不明となり、放送塔や印刷所といったマス媒体を制圧されながらも、ランズベルギス率いる議会は屈伏せず、多くの大衆も身を挺して戦車に囲まれる議会を防衛し、臨時議会はサーユディスから経済通ヴァグノリウス (Gediminas Vagnorius) を首相として選出する。リトアニア暫定政府の外交努力、また西欧諸国からの批判やゴルバチョフの決断もあって議会への武力突入はおこなわれず、リトアニアの独立への動きは掣肘をうけつつも継続された。同年8月の反ゴルバチョフクーデター後の9月6日にはソ連からも公的な独立承認を他のバルトと諸国と共に勝ち取り、92年のアビシャラ内閣をへて独立後最初の選挙を迎えることになる。

3.2 1992年-1996年

リトアニアの国会は一院制であり、全141議席のうち70議席を比例区で、71議席を小選挙区で争う並立制である。92年の段階では比例区阻止条項として4%が導入され（96年以降は5%、選挙連合に対しては7%）、また本選挙のみ拘束名簿式を採用していた。各候補者は重複立候補が可能である。以下が92年総選挙の大まかな結果である。

表1 1992年総選挙結果

| 政党名 | 議席 |
|---------------------------|----|
| リトアニア民主労働党 (LDDP) | 73 |
| サーユディス会派 (93年に祖国同盟 TS-LK) | 30 |
| リトアニアキリスト教民主党 LKDP・諸派連合 | 18 |
| リトアニア社会民主党 (LSDP) | 8 |
| リトアニアポーランド人同盟 (後の LLRA) | 4 |
| リトアニア中道運動 (93年に中道同盟 LCS) | 2 |
| 諸派および無所属 | 6 |

この選挙にて議席を獲得した主な政党はリトアニア民主労働党（LDDP：以下民主労働党）、祖国同盟-リトアニア保守党（TS-LK：以下祖国同盟）、リトアニアキリスト教民主党（LKDP：以下キリスト教民主党）、リトアニア中道同盟（LCS：以下中道同盟）リトアニア社会民主党（LSDP：以下社会民主党）の5つである。民主労働党は共産党改革派を母体とし、そのリーダーには共産党改革派トップであったブラザウスカスが就いていた。祖国同盟は旧サーユディス運動のリーダーであり英雄的な評価を受けていたランズベルギスをリーダーとして、サーユディスメンバーを中心に組織改編を行って成立した保守政党である。民族派であったが経済政策は前述の民主労働党以上に大きな政府を志向していた点でポピュリストティックでもあった²⁰。キリスト教民主党は戦間独立期に存在していた政党の復活であるとしているが、おもにサーユディス運動のカウナス地方グループが多く参入して再結成された²¹。社会民主党もまた戦間期に存在した政党の復古を主張し、左派的なプログラムを提唱していたが、共産党後継政党である民主労働党との関係は好ましくなく（詳細後述）、また政策としてもより大きな政府を志向する傾向があった。結成当時の党首はサカラスであった。中道同盟は、選挙当時はまだ「リトアニア中道運動（LCJ）」という名称でオゾラス（Romualdas Ozolas）によって率いられていた。特筆すべきことに、これら主要5政党の党首はいずれも3.11独立宣言署名者、すなわちシグナタライであった。これに加えて、リトアニア南東部に多く居住するポーランド系住民による政党も一定の議席を得た。

選挙結果は民主労働党の単独過半数という圧勝に終わったが、この結果は党首ブラザウスカスですら予想していなかったとされる²²。民主労働党の圧勝の要因についてはいくつか考えられる。もっともよくいわれるのは、当時リトアニアが経験していた不況に対して、90年から92年の間、民族主義的イデオロギーを基本とし、実務経験に欠けるランズベルギスのサーユディス系政府が妥当な対策を取れず、「広範な行政経験のある」旧体制エリートが多く含まれた民主労働党が好まれたという説明である²³。ただし、この要因だけでは、同じように民主化後の不況を経験した他の東欧諸国

でも同様の選挙結果がみられていてしかるべきなので、付属的な理由として、1. ポーランド人やロシア人などの、選挙権をもつ民族的少数派の支持が民主労働党に集中していたことや²⁴、2. ブラザウスカスのカリスマ的人気、といった（やや地域特殊論的な）要素も棄却できないだろう。ブラザウスカスは、祖国同盟支持者や米国亡命コミュニティ帰りの人々、あるいはランズベルギスを「独立回復の英雄」とする西側メディア等からは、旧体制の人物とみなされていたが、実際には多くの現地リトアニア人から、モスクワとの現実的交渉を完遂し、デファクトな独立を達成した愛国者として絶大な人気と信頼を勝ち得ていた²⁵。

1992年以降、内閣は民主労働党の単独政権として運営が可能となり、ルビース内閣が成立した。ただしルビースは民主労働党の党員ではなく、翌1993年の第1回大統領選挙までという条件で就任した財界出身の首相であったため、比較的短い任期でその責務を終えた²⁶。その1993年大統領選挙では民主労働党のブラザウスカスが、北米亡命コミュニティ出身のロゾライティスを破り大統領へ就任する²⁷。

その後首相に就いたのは民主労働党のシュレジェヴィチウスである。シグナタライ以外として初の首相であるシュレジェヴィチウスは約2年半ほどその地位にあり、ブラザウスカス大統領とともにロシア軍の早期撤退や、EU・NATOとの結びつき強化を実現し、ドラスティックな自由化政策をとらず、また隣国エストニア・ラトビアの右派政権ほどには、ロシアとの関係を悪化させなかった。これらの業績によって民主労働党内閣は一定の支持を国民から受けていた。しかし、当該内閣および政権与党の民主労働党は1995年に発生した2つの主要金融機関（リトアニア株式投資銀行、リティンボックス銀行）の破たん、それにとまなう急速な経済情勢の悪化、さらに上記金融機関破綻直前に預金引き落としをしていたシュレジェヴィチウスのスキャンダルと、汚職追及キャンペーンによって急速に支持を失った。一連の汚職批判攻撃の筆頭には、オゾラス率いる中道同盟の腐敗撤廃キャンペーンも存在していた。野党第1党の祖国同盟よりも、左右の大政党に挟まれた中道同盟の攻撃の方がより苛烈であった。それが効果を発揮したのかオゾラスは後述する1996年総選挙で、大

きな選挙区変更を行ったにもかかわらず²⁸小選挙区で圧勝した。ブラザウスカス大統領からも批判を受けたシュレジェヴィチウスは辞職し、民主労働党は1995年の統一地方選挙で大敗北し、後任のスタンケヴィチウス内閣もすぐに1996年総選挙を迎えるにいたった。

3.3 1996年-2000年

1996年総選挙ではやや細かい制度変更があり、前述の通り、比例区における阻止条項が5%となり、また複数の政党が合同リスト（選挙連合）を組んだ場合の閾値が7%となった。また選好投票が可能となっている。下はその結果である。

表2 1996年総選挙結果

| 政党名 | 議席 |
|------------------------|----|
| 祖国同盟-リトアニア保守党 (TS-LK) | 70 |
| リトアニアキリスト教民主党 (LKDP) | 16 |
| リトアニア民主労働党 (LDDP) | 13 |
| リトアニア中道同盟 (LCS) | 13 |
| リトアニア社会民主党 (LSDP) | 12 |
| リトアニアポーランド人選挙運動 (LLRA) | 3 |
| 諸派および無所属 | 14 |

民主労働党周辺のスキャンダル、および経済的不況に対する業績投票の結果もあって、選挙結果は右派側に大きくスイングした結果となった。祖国同盟は70議席とほぼ半数の議席を獲得し、キリスト教民主党とともに元首相かつシグナタライのヴァグノリウスを擁立して連立政権を構成することになる。中道同盟は、正式な連立協定は組まなかったものの2名が内閣閣僚としてが参与した。第8代首相として第2次ヴァグノリウス内閣がスタートし、ランズベルギスはセイマス議長に就任した。なお、リトアニア政党政治においては、議会議長が事実上のNo.2ポジションである。

2つの保守政党に支えられ順調に改革を進めるヴァグノリウス内閣は次の選挙まで任期を全うするかに思われた。しかし2つの要素が当該内閣に降りかかる。ひとつは1998年の大統領選挙であり、もうひとつはロシア金融危機である。政権与党は深刻な内部分裂に襲われることになる。

そもそも、急進的・民族主義的な傾向をもつ音楽学者ランズベルギスと、実務家であり経済通のヴァグノリウスの間には、サーユディス結成メン

バーという背景を共有していながら一定の温度差が存在していた。特にヴァグノリウスが首相になってからというもの、依然としてサーユディス結成当時の理想を追求し、民族主義的な理念の保全と反口姿勢を重要視するイデアリストのランズベルギス議長と、よりプラグマティックな政策を志向する首相ヴァグノリウスの不和は決定的であった²⁹。それでも、1997-8年の大統領選挙ではランズベルギスが立候補することで祖国同盟によって大統領と首相の双方を抑える心づもりであった。ところがその大統領選挙では米国亡命リトアニア人であり米国官僚でもありながらリトアニアに帰還したアダムクス (Valdas Adamkus) と、リトアニア初代検事総長パウラウスカス (Artūras Paulauskas) の後塵を拝し、決選投票にすら出られないという事態に直面する。国民に対するランズベルギスの威光は過去のものになりつつあった。

当選したアダムクス大統領は無党派の人であったが³⁰中道同盟や自由同盟などへの支持態度を有しており、従来リトアニア政党システムに欠けていた、社会民主主義でも保守主義でもない自由主義陣営を代表する大統領であった³¹。アダムクス大統領は就任するや否や立法府との対立を隠すことなく、経済状況の改善を達成できない「ヴァグノリウスは信用できない」と批判を展開した³²。この一連の顛末に関して、アダムクス大統領が及ぼした権力行使の是非については憲法上の規定に抵触するのではないかとリトアニア国内でも議論が存在していたが、結果としてヴァグノリウスは「意味のない不要な政争を終わらせるため」と首相を辞することになる³³。

新しい首相候補としてアダムクスに指名されたのは、当時のヴィリニウス市長であり、元スタントパイロットでもあったパクス (Rolandas Paksas) であった。全国政治に基盤のない祖国同盟党員であったが、当時のヴィリニウス市政の手腕から、一定の人気を博していた人物であった。

祖国同盟は新首相の選出に際しイニシアチブを取れず、大統領の意向によって新たな後継者を受け入れる形となった³⁴。しかしそのパクス内閣は短命に終わる。当時、政府はロシアによる資本介入への予防策として、リトアニア最大の石油精製施設である国営マジェイケイ石油精製所を米国

資本へと売却することを推進していた。しかしパクスは安全保障上、また彼の国家主義の観点からリトアニア最大のエネルギー調達機関の売却を危惧し、党と衝突してわずか6カ月で首相を辞任してしまう。同時に祖国同盟党員であることもやめ、当時まだ泡沫政党であった自由同盟（LLS）³⁵へと籍を移した。ただし、これについてはロシア金融危機の波及を受けたリトアニア経済不況の責を逃れるための口実という見解もある³⁶。

すでにランズベルギスおよびヴァグノリウスら既存指導者の求心力が減る中、次期首相はランズベルギス議長の元で副議長を務めていたクビリウス（Andrius Kubilius）によって担われた。しかし、より過激なイデオロギーの保全を目指すグループは祖国人民党（TLP）を結党し祖国同盟から分離する（99年10月23日）。これによって数名の議員が祖国同盟から離反したが、それを率いたアンドリキエネもまたシグナタライであった。連立パートナーだったキリスト教民主党でも、数名の議員が近代キリスト教民主党（MKDS）を結成し、教条化・反西欧化する母体組織に反発して脱退する³⁷。2000年選挙直前の7月にはヴァグノリウスも党を割り、12名の議員を引き連れて「穏健保守同盟（NKS）」という、民族主義的理想を放棄できない祖国同盟主流派に対して皮肉めいた名の政党を結成することになる。この様に、右派陣営の雄である祖国同盟からは、多くの脱党者が相次いだ。

一方、新しい政治グループの成長もみられた。1997-98大統領選挙で、僅差で2位となったパウラウスカスは自身の政党として中道左派的な綱領を掲げた新同盟-社会自由党（NS<SL>：以下新同盟）を結成し、2000年選挙に備えていた。自由同盟もカリスマ的な人気をほこるパクススの加入と党首就任で国民的な支持を得ていた³⁸。アダムクス大統領も、第3勢力の政治家として、当時台頭しつつあった第3勢力ブロック（具体的には自由同盟、中道同盟、新同盟、MKDS）への支持態度を隠すことはなかった。

そのころの左派陣営の様子にも言及しよう。先述したように、従来社会民主党と民主労働党の間には同じ左派的政党でありながら一定の距離感が存在していた。民主労働党のブラザウスカスは社会民主党との協力に前向きな姿勢を持っていたが、

社会民主党側は大きな国家経済を志向していたので、民主労働党が緩やかながらも推進した私有化政策とは相容れず、また何より社会民主党は過去に共産党に抑圧された経緯があるなど歴史的な軋轢をもっており、民主労働党をノメンクラトゥラの党であるとみなし批判していた³⁹。だが、勢力の増さない社会民主党内にも民主労働党との協調をなすべきだという声は根強くあり、1997年の第20回党大会は民主労働党との合併構想を巡って紛糾した⁴⁰。次回党大会が行われた1999年5月29日、民主労働党接近派アンドリュカイティス（Vytenis Andriukaitis）を党首として選ぶことが正式決定し民主労働党との接近が既定路線となった。なお、アンドリュカイティスもシグナタライである。この際、反対派を率いたダギスは比例区選出の弱小議員であり、結局のところ社会民主党を離党したのはわずか5人⁴¹であった。民労・社民の両党は2000年の総選挙に対して、歴史的軋轢を超えて合同リストで臨むことを決定する。同年9月3日におこなわれた合同党大会はきわめて象徴的であり、両者は合併に向けて、1998年の大統領任期終了と共に一時は政界を引退していたブラザウスカスを擁立することとする⁴²。

1996年から2000年までのリトアニア政党政治を要約するならば、「右派における分裂、中道の台頭、左派の合同」の時代といえるだろう。それぞれ、祖国同盟とキリスト教民主党からの分離独立の頻発、新同盟および自由同盟の台頭、社会民主党と民主労働党の合同に象徴される。

また、パクススやパウラウスカスのような、リトアニア独立達成の政治に直接はかかわっていない、新しい世代が登場しはじめた時期でもある。リトアニア政治の権力闘争は、第1世代エリート内の権力闘争だけでなく、世代間闘争の様相も示し始めてきた。

3.4 2000年-2004年

まずは選挙結果を示す。

クビリウス政権下でロシア金融危機の影響を脱しつつあったリトアニアではあったが、依然として絶対的な経済状況は好ましくなく、ふたたび政権与党への懲罰投票がなされるにいたった。祖国同盟はメンバーの脱退もありわずか9議席を確保したにとどまり、キリスト教民主党にいたっては

表3 2000年総選挙結果

| 政党名 | 議席 |
|---------------------------------------|----|
| 民主労働党・社会民主党・諸派連合「ブラザウスカス社会民主連合」(ABSK) | 51 |
| リトアニア自由同盟 (LLS) | 34 |
| 新同盟 (社会自由党) (NS<SL>) | 29 |
| 祖国同盟-リトアニア保守党 (TS-LK) | 9 |
| リトアニア農民党 (LVP) | 4 |
| リトアニア中道同盟 (LCS) | 2 |
| リトアニアキリスト教民主党 (LKDP) | 2 |
| 諸派および無所属 | 10 |

議席喪失の瀬戸際にまで追い込まれた。

第1党は、名目上、社会民主党と民主労働党を中心とした選挙連合「アルギルダス・ブラザウスカス社会民主連合 (ABSK)」によって占められた。この中には、泡沫政党ではあるがプルスキエネ率いる女性党・新民主党 (NDP) も加わっていた。とはいえ実際に選挙における勝利をつかんだのは中道の「新政策ブロック」〔自由同盟34：新同盟29：中道同盟2：MKDS：1 合計：66議席〕である⁴³。当時人気絶頂のさなかにあったアダムクス大統領が中道ブロック勢力への支持態度を隠さなかったことや、自由同盟のパクサスや新同盟のパウラウスカスへのカリスマの人気⁴⁴、既存政党への不信感が現れた選挙であった。これにより、民主労働党と祖国同盟による二極的状况はややよわる事になる。民主労働党と社会民主党を主とする左派グループは、他のパートナーが見つからず連立工作に失敗する。一方、泡沫政党のポーランド人選挙運動 (LLRA) と農民党 (LVP) の閣外協力を調達できた中道ブロック諸派による連立が構成され、大統領の指名をうけた自由同盟のパクサスにより、第2次パクサス内閣が同年11月に成立した。新同盟党首のパウラウスカスは事実上の No.2 ポジションであるセイマス議長に就任した。

政権の中心を担う新同盟と自由同盟はそれぞれ中道右派と中道左派を代表する新しい政党であり、また両党リーダーであるパウラウスカス、パクサスともに、独立運動時代より後に台頭したという意味で新世代のエリートであった。しかし、リトアニア政治における世代交代かともみられた2000年総選挙以降の内閣運営はいささか劇的な展開を迎える。結局は諸派の寄せ集めにすぎなかったパ

クサス内閣は、年金改革、経済政策、そしてエネルギー政策をめぐる内部で対立してしまう⁴⁵。その間、パウラウスカス率いる新同盟は、経済政策等でスタンスの近い社会民主党 (このときすでに民主労働党との合併が終了済みである。詳細後述) との連立を目指した水面下での交渉を始めていた。そして翌年の6月18日、新同盟は政権への反旗を公にし、与党を脱してパクサス内閣を終焉させる⁴⁶。そしてすぐさま新同盟と社会民主党は、洪るアダムクス大統領を押し切ってブラザウスカスを首相候補として指名せしめ、ブラザウスカス内閣を成立させる。1998年大統領選挙決選投票において、惜敗率98.5%という僅差でアダムクスに敗れたパウラウスカスが、アダムクスを屈服させた瞬間でもあった。本内閣でもパウラウスカスはセイマス議長の座に収まった。

その直前、左派グループでは社会民主党と民主労働党の統合が完了していた。両者は、名目上は対等な関係で合併を実現し⁴⁷、リトアニア最大の党員数 (当時)⁴⁸ を誇る新生社会民主党として、元民主労働党党首ブラザウスカスを党首として出発していた。

新しく成立したブラザウスカス内閣には、プルスキエネ率いる新民主党も加わり、非常に安定的な政権を運営する。政権内においても一定の政策上の対立はあったが、内政では失業率の低下と賃金上昇を実現し、また外交政策では EU と NATO 加盟へのインビテーション獲得という悲願を達成した。社会民主党の有する歴史的に長い堅固性とブラザウスカスの卓越したリーダーシップも安定性に資したが、野党各派が弱小であったことも貢献した。

その野党側の状況に言及しよう。首相ブラザウスカスと対をなすリトアニア独立政治の巨人、ランズベルギスが依然として党首の座にあった祖国同盟は議席数が少なく、しかも過去に首相を辞任させてまで進めたマジェイケイ製油所の米国資本への売却がマスコミによって批判されていた⁴⁹。さらに都合の悪いことに、本来その売却は、ロシア資本による当該製油所の資本乗っ取りを避けることを一つの動機としていたのだが、売却先の米国資本が、株式をロシアユコスへ転売してしまうという事態に直面し、苦しい境遇に追い込まれていた。しかし、03年には、2代目党首の座にクビ

(参考資料) 独立リトアニア政党系譜概観図 (主要政党や特殊な政党のみ 細かい名称変更などは割愛)

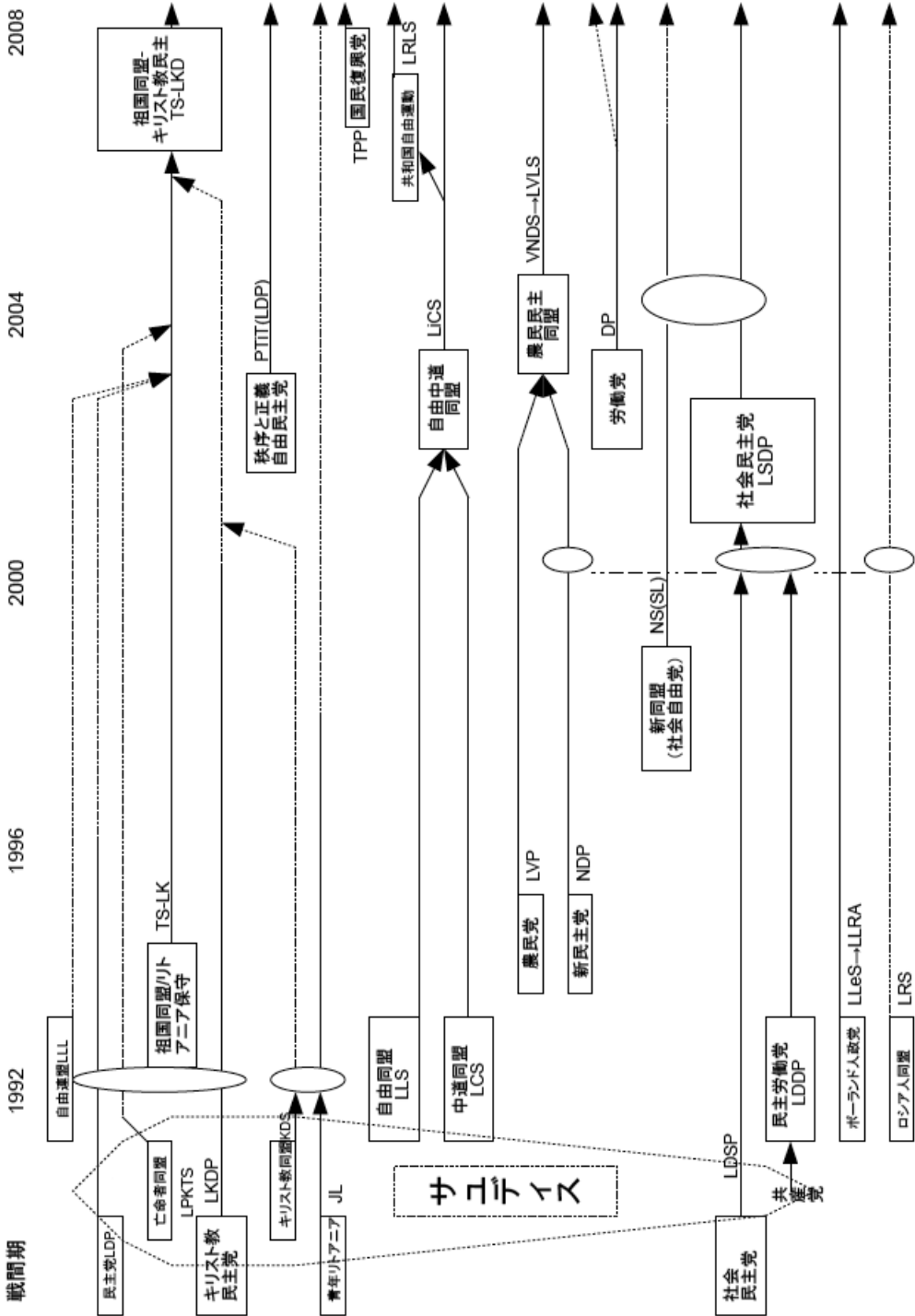


図1 独立リトアニア政党系譜図

リウスが就任。また過去に祖国同盟を脱した祖国人民党グループ（当時はいくつかの政党との合併でリトアニア右翼同盟という名前に変わっていた）が復帰し、またもろもろの民族主義的泡沫政党を吸収するなど、議席は変わらないものの党員数が増加することで組織的基盤が強くなっていた。なお、ランズベルギスは党首から退いて、EU加盟に際してのオブザーバー役に就いた。彼はこれ以降、欧州議員になるなど、EUでの活動が主となる。キリスト教民主党はもう一つのキリスト教政党であるキリスト教同盟（KDS）と合併して後者の党名と党首を継承したが⁵⁰、議席が2から3になっただけであった。新同盟の離反によって最大野党に転落した自由同盟では、パクサスが党首不適任として辞職に追い込まれていた。党首の座を前党首のゲントヴィラス（Eugenijus Gentvilas）に譲ったパクサスは、彼との個人的確執もあり⁵¹、2002年に自身の政党である自由民主党（LDP、後に「秩序と正義」〈PTiT〉と改名）を形成してさらなる右派勢力内の細分化をもたらした。やや国家主義的な主張を展開する自民党党首パクサスの人気は徐々に低下しているかのように思われていた。

2002-3年には大統領選挙がおこなわれたが、2期目の当選を目指すアダムクスに対する挑戦者の中には、プルンスキエネ、パウラウスカス、アンドリュカイティス、ゲントヴィラスそしてパクサスという錚々たる名前が並んでいた。第1回投票ではアダムクスが1位、パクサスが2位となり決選投票へもつれ込む。その決選投票では結果が逆転し、新大統領として選出されたパクサスは再びリトアニア政治の第一線に返り咲いた。

パクサスはもともと首都ヴィリニウス周辺とそこに多くすむポーランド系住民の支持が厚かったが、今回の選挙では潤沢な資金援助を元に、外交重視であったアダムクス大統領との差別化として地方農村部を巡業して支持基盤を固めていた⁵²。しかしその資金援助元であるロシア人実業家のボリソフが、国連により輸出入禁止制裁を受けているスーダンに対してヘリコプターを売却していたことがわかり、さらにパクサスの安全保障アドバイザーがロシアの組織犯罪集団と繋がりをもっていったことが国家安全保障局の調べによって判明した。パクサスは、選挙戦での支援の見返りとして

ボリソフにリトアニア国籍を与えていたが、このことが憲法裁判所によって憲法違反であるとみなされ、議会からは国外からの影響力に対して国家を危機に陥れた咎で弾劾された。2004年初頭に大統領職を追われ、公民権行使を3年間停止された⁵³。

憲法上の規定により次期大統領選挙がおこなわれるまでは、セイマス議長が暫定大統領としてその任を担うことになるが、大統領への就任を目指し続けていたパウラウスカスが奇しくもその座に着いた。04年の夏におこなわれた大統領選挙ではアダムクスとプルンスキエネの決選投票となり、一定の差をつけて再びアダムクスが大統領となった。3位にはシグナタライのアウシュトレヴィチウス（Petras Auštrevičius）がいた。

2001年に成立していたブラザウスカス内閣は、いわゆる *Baltic Tiger* と言われていたバブル的経済好況に加え、失業率の増加に賃金上昇、EU・NATOへの加盟達成、さらに首相の個人的人気もあって安定した長期政権になるであろうと見込まれており⁵⁴、実際に閣僚の顔ぶれも一貫していた。唯一の例外はグリーバウスカイト財相（Dalia Grybauskaitė）の辞任であったが、これはEU入りに伴い彼女が欧州委員（リトアニア代表）になったためである。だがそのEU入りによって初めておこなわれた2004年春のEU議会選挙では、新興政党である労働党（DP：詳細後述）に議席を奪われるなど不安材料をのこしていた。また、リベラル諸陣営では自由同盟と中道同盟が合併して2003年に自由中道同盟（LiCS）が成立していた。初代党首には、当時のヴィリニウス市長であり32歳のズオカス（Artūras Zuokas）が就任した。なお、この際、中道同盟側から一部の合併反対派が国民中央党（後のリトアニア中央党）として脱党している。その党首はあのオゾラスであり、ここにも世代交代の予兆が見られる。なお、大統領選で2位におわった元首相プルンスキエネは、その個人的カリスマ性によって新民主党の議席を維持させ続けていたが、いかに議席は少なく与党内にあっても影響力は微弱なものであった。その後、同じく中道左派でありながら小政党である農民党との合同（事実上の吸収）を実施し、04年の総選挙には選挙連合を組む。その後両者はすぐに農民新民主党同盟（VNDPS：後にリトアニア

ア農民人民同盟 LVLS に改名)として成立した。

3.5 2004年-2008年

表4 2004年総選挙結果

| 政党名 | 議席 |
|----------------------|----|
| 労働党 (DP) | 39 |
| 祖国同盟 (TS) | 25 |
| リトアニア社会民主党 (LDSP) | 20 |
| 自由中道同盟 (LiCS) | 18 |
| 新同盟 (社会自由党) (NS<SL>) | 11 |
| 自由民主党 (LDP) | 10 |
| リトアニア農民新民主同盟 (VNDPS) | 10 |
| 諸派および無所属 | 8 |

2004年総選挙における特筆すべき事項は労働党 (DP) の台頭である。労働党は政党名こそ前述の民主労働党と似ているが、まったく無関係の政党である。元ロシア人実業家であり、ケダイネイ地区選出の無所属議員ウスパスキフ (Viktor Uspaskich: リトアニア名ウスパスキハス Viktoras Uspaskichas) を中心としたポピュリスト政党であり、既存政党への批判とポピュリスト的言説によって爆発的人気を博し、特に農村部等の周辺地域での支持が強かった⁵⁵。弾劾されたとはいえ、依然として人気のあるパクス率いる自由民主党 (秩序と正義) も10議席を獲得しており、リトアニア政党政治は、2000年総選挙に引き続きニューカマーの台頭を受ける。

労働党は第1党ではあったものの過半数71議席には遠く及ばないため、連立パートナーが必要であった。しかし、当初はどの政党との連立も達成できず、むしろ政権党であったブラザウスカス率いる社会民主党およびパウラウスカス率いる新同盟が、新興勢力たる労働党を除いた大連立 (虹色連立) を模索していたため⁵⁶、バーゲニングの主導権を取ることが出来なかった。その後、社会民主党と新同盟が方針を転換して労働党へ接近し、農民新民主党を含めた4党連立案を纏め上げ、第2次ブラザウスカス内閣を発足させる。議長は継続してパウラウスカスが選出され、労働党党首のウスパスキフは要職である経済大臣に納まった。なおこの選挙は、リトアニア政党政治史が始まって以来初めて、選挙前の与党が継続して勝利した例である。

だが第2次ブラザウスカス内閣は労働党ウスパスキフの加入によって波瀾に満ちたものになる⁵⁷。組閣されて日も浅い2005年春に、ウスパスキフ経済相は、財務省管轄であるはずのEU構造基金に関する権限をもとめ、社民党員プトケヴィチウス財相 (Algirdas Butkevičius) と対立する。当該事項に関する意思決定について、財務省以外も関わることとする妥協によって本対立は収束を迎えるが、ふたたびウスパスキフが税制改革を巡ってプトケヴィチウス財相に対する批判を公然とはじめたため、5月にプトケヴィチウス財相は大臣を辞任してしまう。だが第2次ブラザウスカス内閣の波瀾はこれで収まらない。5月にロシアでおこなわれた対独戦勝60周年記念パレードに対して、リトアニア大統領や外相が出席を断る中、ブルンスキエネ農相が招待に応じて勝手に出席してしまったのである。ブラザウスカス首相は彼女の行動を擁護するが、大統領と野党祖国同盟の追及は苛烈であった。

しかし、この問題はすぐに捨て置かれることになる。ひとつはエネルギー問題、もうひとつは汚職問題によってである。このころ、マジエイケイ石油精製所の株式を保有していたロシアユコスの経営が悪化し、かつロシア国内でユコスに対する政府からの介入が強まっていた。もしもリトアニア最大のエネルギー拠点をロシア政府の影響下に置かれるようなことがあれば、リトアニアの国家生命を掌握されることに等しく、そのような事態はなんとしても避けたいリトアニア政府と議会は当該株式の買取に取組まなければならなかった。また同時期に、組閣早々波瀾を呼び起こしていたウスパスキフ本人に、汚職疑惑がかかる。別件の汚職疑惑がかけられていたヴィリニユス市長かつ自由中道同盟党首のズオカスとともに、調査委員会が開かれることになる (ちなみにこれをうけて自由中道同盟党内反ズオカス派が離党し、アウシュトレヴィチウスを党首として翌2006年に「リトアニア共和国自由運動: LRLS」を立ち上げている)。アダムクス大統領、ブラザウスカス首相、パウラウスカス議長から公然と批判され、また調査の過程で学歴詐称疑惑も浮上したウスパスキフは、委員会の決議が出る前に閣僚および議員をやめてしまう。(ただしこの際、党としての連立は解消せず)。

ところが、次にブラザウスカス首相の妻が経営

していたホテルを巡って、首相本人に汚職疑惑がかかると、これに対して与党内の労働党が意趣返しとばかりに猛烈な糾弾を展開する。ウスパスキフは、さらにアダムクス大統領に対しても攻撃を開始し、先述したズオカスにアダムクスが違法な資金援助をおこなっていたという主張を展開した。だがこれら一連の攻撃は連立メンバーから反感を買い、再び同じ与党・新同盟のパウラウスカス議長からも批判される。だが、今度はそのパウラウスカス議長に対して祖国同盟から不信任案が提示されると、労働党の一部が賛成に回り可決されてしまう⁵⁸。これを受けて06年4月パウラウスカスと新同盟は即座に連立を解消する。

このように与党内での内部闘争が激化する中で、クビリウス率いる祖国同盟は混乱解消のために解散総選挙を提案するものの、世論調査の結果が芳しくない他の野党の賛同を得ることができなかった。また大統領にとっても、ブラザウスカス内閣が好ましくないとはいえ、正体不明のウスパスキハス率いる労働党中心の再編成がおこなわれる可能性よりは良く退陣を求めなかった⁵⁹。こうして06年4月危機を乗り切った第2次ブラザウスカス政権は社民主党・農民人民同盟・労働党71議席によるぎりぎり過半数の運営となる。この直後、ウスパスキフ労働党の行動に反感を抱いていた党内メンバーは、党No.2であったムンティアナスを中心として労働党から分離して、市民民主党(PDP)を立ち上げ連立入りしており、ムンティアナスがパウラウスカスの後をついで議長として選出されていた。

だが翌月の5月に、労働党に不正資金流用疑惑が持ち上がり、再びウスパスキフほか数人の議員が疑惑の対象となった。ウスパスキフは即座に党首の座を退き、「ロシアでの家族の葬儀」を口実にロシアに逃亡してしまい、リトアニア捜査当局の手を逃れる。党としても与党から脱退し⁶⁰、事ここに至っては政権運営不能と判断したブラザウスカスは6月1日に辞職し、アダムクス大統領に次期政権組閣のイニシアチブを預ける。アダムクスは、当初社会民主党から祖国同盟までを含めた大連立構想を抱いていたが、ブラザウスカスが指名した暫定首相をそのまま首相として選出するプランは右派陣営の支持を得られず頓挫した。結局、元防衛大臣で実務的な社会民主党キルキラス(元

民主労働党)が、中道から左派にかけての幅広い支持を受けて選出された。だが、連立に参加したのは社会民主党(27議席)、農民人民同盟(13議席)、自由中道同盟(8議席)、市民民主党(11議席)の4党のみであり、総保有議席内閣59の少数派内閣として、キルキラス内閣が2006年7月に成立となった。

キルキラスは1990年の民主労働党成立の時代からの副党首であり、91年からは第一副党首の位置にあった。2001年に新生社会民主党ができてからも、副党首の座にあり、まさにブラザウスカス直系の第2世代政治エリートであるといえる。社会民主党党首になるのは、ブラザウスカスが正式に党首を辞任する07年になってからのことであるが、右派祖国同盟にはクビリウス、左派社会民主党にはキルキラスと、それぞれランズベルギス、ブラザウスカスといったリトアニア独立政治における2人の巨人の薫陶を受けた政治エリートが、リトアニア政党政治の中心を担う時代となった。

そしてこの2人が率いる社会民主党連立政権と最大野党祖国同盟は閣外協力協定を結ぶ。主たる目的は、少数派内閣であるがゆえの議事安定のためである。その見返りとして祖国同盟党首クビリウスはセイマス副議長として選出され、また祖国同盟の政策のいくつかが施策に盛り込まれた。この擬似的大連立状況は左右両雄の党首キルキラスとクビリウスの頭文字をとって2Kプロジェクト・2K連立などとも呼ばれた⁶¹。実際に、9月に議長ムンティアナスに対して、「秩序と正義」のパクサスが不信任案を出したときには、祖国同盟は賛成にまわらずムンティアナスおよび与党を守る働きをした。5月に4人の閣僚に対して、「秩序と正義」および労働党から一挙に不信任決議案が出されたときにも同様の対応をとり、これらすべてを否決させることができた⁶²。

与党はこの間も多数派工作の一環として、パウラウスカス率いる新同盟への政権入りを誘い続けていたが、逡巡の後に新同盟が翌年1月連立への復帰を決定したため多数派政権へと変化した⁶³。政権はより安定的なものになると見られていたが、9月の秋になると、クビリウスの祖国同盟が、社会民主党との協力関係を解消する旨を表明した⁶⁴。政府が汚職に対して有効な防衛策を提示できないことや、リトアニアにとっての一大争点で

あるエネルギー政策をめぐる対立が理由として挙げられるが、新同盟が加わって多数派内閣となっていたキルキラス内閣に対して有効なバーゲニングパワーを発揮出来なくなったであろうことが予想される。2K プロジェクトは1年ほどで終了した事になった。

再び左右の対立に戻されたリトアニア政党政治は、2008年のロシア-グルジア紛争をめぐる論争、および世界金融危機に巻き込まれての経済不況を受ける事になる。この間の08年4月、与党に復帰した新同盟に追い出される形でムンティアナスは議長の座を退き、市民民主党も連立を去った⁶⁵。5月には、ついに祖国同盟がながらく協力関係にあったキリスト教民主同盟との合併をおこない、リトアニア最大党員数（20400人）⁶⁶の政党、祖国同盟-リトアニアキリスト教民主党（TS-LKD：以下文中では継続して祖国同盟とのみ表記）となって選挙に挑むことになる。

3.6 2008年以降

表5 2008年総選挙結果

| 政党名 | 議席 |
|----------------------------|----|
| 祖国同盟-リトアニアキリスト教民主党（TS-LKD） | 45 |
| リトアニア社会民主党（LSDP） | 25 |
| 国民復興党（TPP） | 16 |
| 政党秩序と正義〈自由民主党〉（PTiT<LDP>） | 15 |
| リトアニア共和国自由運動（LRLS） | 11 |
| 労働党（DP） | 10 |
| 自由中道同盟（LiCS） | 8 |
| 諸派および無所属 | 11 |

本選挙では深刻な経済不況をうけて前政権党は、軒並み議席をへらし、反対に祖国同盟を中心とした右派政党が議席を伸ばした。

まず議席を減らした勢力に着目すると、前政権に参与していた小政党の衰退が目立った。市民民主党が議席を失い、農民人民同盟は3議席、新同盟もわずか1議席に終わってしまった。

市民民主党党首のムンティアナスはもとケダイネイ市長であり、ウスパスキフとともに、同じケダイネイ地方出身の政治家として労働党を立ち上げ、また党内 no.1 と no.2 の位置にいるという同志であった。しかしウスパスキフ率いる労働党に

見切りをつけ独自の会派を構成するにいたったのである。08年選挙においては地盤であるケダイネイの小選挙区第43選挙区から出馬し、党内で唯一重複立候補を行わないという自信を持っていたようだが、結局労働党候補に敗戦した。

新同盟の1議席はパウラウスカスのものではない。彼は落選したのだ。2000年総選挙（およびそれに先行する統一地方選挙）で政治デビューを果たした新同盟は、党首パウラウスカスの議会議長、政権入り、暫定大統領という輝かしい経歴をささえる権力基盤となってきたが、結党10周年の2008年総選挙を経て、ついに議席喪失の危機に立たされている。農民人民同盟の3議席の中にも、プルンスキエネ党首の議席はない。独立リトアニア初代首相として、シグナタライとして、また歴代閣僚としてリトアニア政治の表舞台に居続けたプルンスキエネの個人的人気による政党運営にも陰りが見えつつある。現在、新同盟と農民人民同盟の議員は、議会内で統一会派を組んで協力関係を模索している。

一方で同じ新興勢力の中でも、労働党および「秩序と正義」といった党は、本選挙でも一定の議席を維持し、ある程度の支持層を得ていることが見受けられる。2007年にふたたびウスパスキフが党首に返り咲いた労働党では下部青年組織による政党を別に立ち上げ選挙で連合を組むなど組織的動員に力を入れ、地方部での支持を中心に10議席を確保しており⁶⁷、また「秩序と正義」も相変わらずヴィリニュス付近での支持が根強い。

さらに、今回の選挙でもふたたびリトアニア政党政治は新興政党の議席獲得を見ることになる。第3党となった国民復興党は、元タレント・TV番組司会者のヴァリンスカス（Arūnas Varinskis）を中心として、非・政治家による政党として立ち上げられた。またその候補者の構成ゆえに、国民復興党はしばしば「セレブリティ政党」揶揄される。国民復興党の議席獲得は、新興ポピュリストによる議席獲得という点では過去の事例にならうものであるが、従来の労働党ウスパスキフや自由民主党パクス、新同盟パウラウスカスや農民新民主同盟プルンスキエネなどが、なにかしらの政治・行政の経験者であったのに対し、ヴァリンスカスはそういった人物とは経歴を異にしており、その意味では非常に新しくまた稀

有な現象でもある。

第1党となった祖国同盟および国民復興党と、リベラル陣営の共和国自由運動と自由中道同盟が政権に参加することによって、計80議席の連立協定が結ばれることになった。首相には祖国同盟党首のクビリウスがつき、議会議長には、連立内第2党である国民復興党党首のヴァリンスカスが選出され、ここで第2次クビリウス政権が発足するにいった。

4. 結論に変えて

ここまで、リトアニアの政党政治の展開を、とくに議会内における各政党の合従連衡・選挙結果に着目しつつ、政治エリートの行動を通じて論じてきた。離党や党内対立、あるいは吸収や合併を見る中で、特に十幾人かの個人に着目する事でリトアニアの政党政治を語る事が十分に可能であった。実際に、リトアニアの政党システムは依然として強固な個人の存在が、重要なファクターであり⁶⁸、分析主体としての設定には一定の妥当性が存在する。また、政党間の合併や離反を論じる際には、そこに存在したインセンティブ構造や緊張について留意を払いながら論じてきた。

90年代初頭のリトアニア政党政治は、旧共産党系と旧サーユディス系の対立という構図をもちながらも、その実、皆が一様に独立宣言を肯定した政治エリートたちであり、独立を担ったものという一定のバックグラウンドを持った者同士での内部闘争でもあった。その中でとりわけ大きな影響力をもったのが、左派旧体制系ブラザウスカスと右派民族派ランズベルギスであり、両者の対立はそのまま民主労働党対祖国同盟という、90年代リトアニア政党政治にみられた二大政党状況とリンクしていた。

90年代後半からは新しい世代の参入も顕著であった。民主労働党や社会民主党、中道同盟、祖国同盟やキリスト教民主党のようなエスタブリッシュメント以外からの挑戦としては、後に自民党を立ち上げたパクサスや新同盟を率いるパウラウスカス、労働党の企業家ウスパスキフや国民復興党のTVタレント・ヴァリンスカスなどがあげられる

だろう。しかし、彼らは皆が皆、一時は政党政治の中で主要な地位にまで上り詰めるものの、それを維持することはまれであった。パウラウスカスは、2000年の中道勢力ブームを担い、また機をみて社民党と協力して長期政権を打ち立て、議長というポジションにつき一時は臨時大統領の座にもあった。しかし、労働党という別の新興勢力によって裏切られ、また08年総選挙で手痛い敗北を見ている。ウスパスキフと労働党は、党としては命脈を保っているが、すでにかつてのような議席は望めるべくもなく、ウスパスキフ本人はすでに名声を失っている。ヴァリンスカスの国民復興党も2009年欧州議会選挙において、得票率が下から2番目の人気という凋落ぶりである。党はすでに2つの会派に分裂してしまっており、本人も、スキャンダルによってつい先刻議長の座を追われている。相対的に、首相と大統領を歴任したパクサスとその秩序と正義は、本人が弾劾されたという過去はあるものの、依然として一定の人気があり、また党としても一定の影響力を維持できている。

しかし結局のところ、これらの権力闘争をへて生き残り、リトアニア政党政治の中で有意なアクターとして振舞いけているのは、06-07年の2Kプロジェクトにみられたように、既存エスタブリッシュメント政党の中で成長してきた政治エリートたちである。祖国同盟プロパー・クビリウスは今なお首相の座にある。旧民労系社会民主党プロパーのキルキラスは、09年に党首の座を後任のプトケヴィチウス（91年より社民党議員）に譲った。労働党のウスパスキフとの間で泥仕合を行い、大臣を辞任したあのプトケヴィチウスである。これが象徴するように、既存エスタブリッシュメント政党とそのエリートが、ときに新勢力の勢いに屈伏させられたかのように見えることはあっても、結局は既存の安定した政党の政治エリートが生き残っている。とはいえ、かならずしも、古参勢力が権力闘争に勝利し続けているわけではない。特に世代間交代は確実に進行している。また、世代交代がスムーズに行われなければ、ヴァグノリウスの穏健保守同盟（現在はキリスト教保守社会同盟）やブルンスキエネの農民人民同盟のように、党としての命脈をたもつことも難しくなってしまう⁶⁹。

もちろん、すべてを政治エリートの闘争に帰着させて、リトアニア政党政治を語りつくすことも

困難である。たとえば自由中道同盟などは、組織や人員としては自由同盟と中道同盟という古くからある勢力を元にしており、自由主義陣営というイデオロギー上のニッチを占めているにもかかわらず、社会民主党や祖国同盟ほどの権勢は得ていない。ここには党としての組織的基盤の強弱など

付録 A：リトアニア歴代内閣構成

| 年 | 歴代内閣 | 与党(灰色は首相所属政党) | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|---|-----------------------|-------|-------|------------|------|------|------|---------------|----------|------|---------|--------|--|--|
| | | ポピュリスト | ポーランド人同盟 | 民主労働党 | 社会民主党 | 新同盟<社会自由党> | 農民同盟 | 自由同盟 | 中道同盟 | 祖国同盟-リトアニア保守党 | キリスト教民主党 | 自由連盟 | 青年リトアニア | ポピュリスト | | |
| 総選挙 | 1991 | 独立移行期内閣時代(90年3月~) (ブルンスキエネーシメーナス→第一次ヴァグノリウス→アビシヤラ) | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1992 | プロニスロヴァス・ルビース内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| 総選挙 | 1993 | LDDP | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1994 | アドルフアス・シュレジェヴィチウス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1995 | LDDP | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1996 | ラウリーナス・スタンケヴィチウス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| 総選挙 | 1997 | LCS TS-LK LKDP | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1998 | 第二次ゲディミナス・ヴァグノリウス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1999 | 第一次ローランダス・バクサス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2000 | 第一次アンドリウス・クピリウス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2001 | 第二次ローランダス・バクサス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| 総選挙 | 2002 | NS(SL) LLS LCS | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2003 | LSDP NS(SL) | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2004 | 第一次アルギルダス・ブラザウスカス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2005 | 第二次アルギルダス・ブラザウスカス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| 総選挙 | 2006 | DP | LSDP NS(SL) VND PS | | | | | | | | | | | | | |
| | 2007 | POP | LSDP NS(SL) LVLS LiCS | | | | | | | | | | | | | |
| | 2008 | PDP | LSDP NS(SL) LVLS LiCS | | | | | | | | | | | | | |
| | 2009 | 第二次アンドリウス・クピリウス内閣 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | LiCS LR LS TS-LKD TPP | | | | | | | | | | | | | | |

Jeffries 2004; Krupavičius 2005, 2006, 2007, 2008; EIU; LRS; VRK 各種データより筆者作成

付録B：主要政治家一覧（アルファベット順）

| 苗字 | 姓名 | シグナ タライ | 主要プロフィール(2009年10月現在) (大統領・首相・議長・党首・首都市長のみ 就任順) |
|-------------|--------------------------|------------|--|
| アビシャラ | Abišala, Aleksandras A. | ● | 4代首相 (92) |
| アダムクス | Adamkus, Valdas | | 2代大統領 (98-03), 4代大統領 (04-09) |
| アンドリキエネ | Andrikienė, Laima L. | ● | 祖国人民党初代党首 (99-01) |
| アンドリュカイティス | Andriukaitis, Vytenis P. | ● | 社会民主党3代党首 (99-01) |
| アウシュトレヴィチウス | Auštrevičius, Petras | | 共和国自由運動初代党首 (06-08) |
| ブトケヴィチウス | Butkevičius, Algirdas. | | 社会民主党6代党首 (=合併後3代 09-現在) |
| ブラザウスカス | Brazauskas, Algirdas M. | ● | 共産党改革派リーダー, 民主労働党初代党首 (90-93), 2代議長 (92-93), 初代大統領 (93-98), 社会民主党4代党首 (=合併後初代 01-07), 12代首相 (01-04), 13代首相 (04-06) |
| デグティエネ | Degutienė, Irena | | 9代議長 (09-現在) |
| гентヴィラス | Gentvilas, Eugenijus | ● | 自由同盟4代党首 (96-99), 自由同盟6代党首 (01-03) |
| グリーバウスカйте | Grybauskaitė, Dalia | | 5代大統領 (09-現在) |
| ユルシェナス | Juršėnas, Česlovas | ● | 民主労働党2代党首 (93-01), 3代議長 (93-96), 7代議長 (08) |
| キルキラス | Kirkilas, Gediminas | | 14代首相 (06-08), 社会民主党5代党首 (=合併後2代 07-09) |
| クビリウス | Kubilius, Andrius | | 10代首相 (99-00), 祖国同盟2代党首 (03-現在), 15代首相 (08-現在) |
| ランズベルギス | Landsbergis, Vytautas | ● | サーユディスリーダー (88-93), 祖国同盟初代党首 (93-03), 初代議長 (初代大統領選出までの国家元首を兼任 90-92), 4代議長 (96-00) |
| ルビース | Lubys, Bronislovas | ● | 5代首相 (92-93) |
| ムンティアナス | Muntianas, Viktoras | | 市民民主党初代党首 (06-現在), 6代議長 (06-08) |
| オゾラス | Ozolas, Romualdas | ● | 中道同盟初代党首 (92-03), 国民中央党初代党首 (03-現在) |
| パクサス | Paksas, Rolandas | | 9代首相 (99), 11代首相 (00-01), 3代大統領 (03-04), 自由同盟2代党首 (99-01), 自由民主党初代党首 (02), 自由民主党3代党首→秩序と正義初代党首 (04-06), ヴィリニウス市長 (97-99, 00) |
| パウラウスカス | Paulauskas, Artūras | | 新同盟初代党首 (98-現在), 暫定大統領 (04), 5代議長 (00-06) |
| ブルンスキエネ | Prunskienė, Kazimira | ● | 初代首相 (90-91), 女性党-新民主党初代党首 (93-01), 農民新民主同盟初代党首→農民人民民主同盟初代党首 (01-09) |
| サカラス | Sakalas, Aloyzas | ● | 社会民主党2代党首 (91-99) |
| シメーナス | Šimėnas, Albertas | ● | 2代首相 (91) |
| シュレジェヴィチウス | Šleževičius, Adolfas | | 6代首相 (93-96) |
| スタンケヴィチウス | Stankevičius, Laurynas | | 7代首相 (96) |
| ウスパスキフ | Uspaskich, Viktor | | 労働党初代党首 (03-06), 労働党3代党首 (07-現在) |
| ヴァグノリウス | Vagnorius, Gediminas | ● | 3代首相 (91-92), 8代首相 (96-99), 穏健保守同盟初代党首→近代キリスト教社会同盟初代党首 (00-現在) |
| ヴァリンスカス | Valinskas, Arūnas | | 国民復興党党首 (08-現在), 8代議長 (08-09) |
| ズオカス | Zuokas, Artūras | | 自由中道同盟初代党首 (03-05), ヴィリニウス市長 (00-07) |

LRS; VRK 各種データより筆者作成

も重要な要素としてかかわってくるだろう。

また、具体的にどのような社会団体（労組・財界・民族集団・地域集団）と、どのような政党が利害関係にあるかも、実際の政党政治には大きな影響を与えているのであり、それらの要素への配慮も必要である。

しかし、いまだ変革中の社会にあって、政治的利益媒介の中における個人エリートの役割は極めて重要であることは、さまざまな理論的指摘によってなされていることであり、有意な視点である。またそれ以上に、仮に一国や数国の政治を、よりマクロな観点から分析し比較するにしても、定められた制度と構造のなかで、各々の期待と利害と相互作用をもってふるまう最小プレイヤーは、議員個人・政治エリートである。そのような分析上の最小単位への考慮がなければ、より全体的な分析を行う際のマイクロ基礎を妥当に設定することもできない。ゆえに、本稿の試みは、ただ単に歴史的事実を叙述し整理することだけに価値があるのではなく、冒頭で言及したようにより大きな分析を行う際の依拠すべき分析としても学術的貢献をもつものである。

[注]

- 1 Pettai and Kreuzer 1999; Sikk 2005; Budryte 2004; Ishiyama 2001; Rose and Munro 2003.
- 2 彼らの業績を全て挙げることはできないが、主なものとして Lane 2002; Krickus 1997a, 1997b; Krupavicius 1998; Krupavicius and Žvaliauskas 2003; Jurkynas 2003, 2004, 2005; Jurkynas and Ramonaite 2007, Ramonaite 2006; Novagrockiene 2001; Duvold and Jurkynas 2003.
- 3 Lieven 1994, Smith eds. 1996.
- 4 Kitschelt 1999; Kitschelt et al. 1999; Grzymała-Busse 2002, 2007; Whitefield 2002; Lewis 2000; Meleshevich 2007; Bugajski 2002; Muller-Rommel et al. 2004.
- 5 Krupavicius 2005, 2006, 2007, 2008.
- 6 Ferrara and Herron 2005; Jurkynas 2009, 2005; Fitzmaurice 2003; Krupavicius and Eitutyte 1999; Krupavicius 1997.
- 7 例えば、細かいことではあるが Muller-Rommel et al. 2004 の内閣構成政党の記述では、ルビースが民主労働党排出の首相という扱いになっているが、これは正確ではない。こういった細かい誤りはしばしば見受けられる。
- 8 畑中・チェバイティス 2006; Adamkus 村田訳2002; 吉野 2000; 佐藤 2007.

- 9 Sengoku 2009; 仙石 2008.
- 10 塩川 2004.
- 11 Matsuzato 2002.
- 12 大中 2009.
- 13 Przeworski and Teune 1970.
- 14 代表的なものに Kitschelt 1999.
- 15 *Signatarai* 大文字でシグナタライとだけ書かれた場合には、特に断り書きがなくても3.11独立宣言への署名者をさすことが多く（まれに1918年2月16日リトアニア第一共和国独立宣言の署名者20名のことをさすこともあるので文脈上の注意は要する）、この場合のシグナタライは125名である。またシグナタライという呼称事態が一種の勲章的役割を果たしている。正確には、男性に対してはシグナタラス、女性に対してはシグナタレと書き分けるべきだが、本論では便宜的にすべて複数形呼称であるシグナタライで統一する。
- 16 なお、リトアニア人氏名の片仮名表記については、リトアニア語における発音規則や原音を尊重しつつも、国内新聞報道や先行研究において定着しているものについてはそちらを参照し、また過度に複雑な表記にならぬようにした。表記ルールの詳細については筆者 web ページにて詳細を示す予定なので、そちらを参照されたい。www.geocities.jp/stebuklas0311/index.html
- 17 Krickus 1997b.
- 18 シメーナスはわずか数日間だけの在職であったため、著作によってはシメーナスをあたかも暫定首相のように扱い、ブルンスキエネの後任がヴァグノリウスであるとする物も多い。しかしリトアニア国会の公的な認識ではそうではない。他の暫定首相と異なり、シメーナスとその内閣は暫定首相・暫定内閣であるとされており、リトアニア国会公式ホームページでも正式な首相および内閣として記録されている。LRV 参照。
- 19 選挙結果は中央選挙委員会ホームページ (VRK) から。より詳細な票のデータについては、中井2008「リトアニアの選挙結果」、仙石学編「ポスト社会主義国の選挙・政党データ（ベータ版）」(web データベース, <http://www.seinan-gu.ac.jp/~sengoku/database> : 2009年10月6日アクセス確認)を参照されたい。
- 20 EIU 1997.
- 21 カウナスはリトアニア第2の都市であるが、首都ヴィリニウスに比して、よりリトアニア民族主義的な傾向・象徴性を持っている。またヴィリニウスは過去においてユダヤ人都市として存在し、Snyder 2003によれば20世紀初頭の調査ではリトアニア語を話すものはわずか2%程度であり、また時代によってリトアニアの版図から外れていたのに対し、カウナスは古城の存在する古都でありまた戦間独立期の首都でもあったからである。また Petersen 2002の110-111にも簡潔な記述がある。さらに周辺の情報ではあるが、2000年統一地方選でカウナス市長になったシュスタウカスは、TS-LK 以上のウルトラナショナルリト政党であるリトアニア解放連盟 LLL から、

- さらに離党したリトアニア解放同盟の党首である。EIU 2001.また本文脚注35番も参照のこと。
- 22 総選挙数日前にリーベンがブラザウスカスにインタビューを行った際、ブラザウスカスはせいぜい1つか2つの関係を排出できれば御の字であるという旨のコメントを出している。Lieven 1994, p.270.
- 23 Krickus 1997a.
- 24 中井2008; Nakai 2009; Lane 2002, p.142; Lieven 1994, p.269.
- 25 Krickus 1997a.
- 26 Vogt 2003 p97; Meleshevich p58; Clark et al. 1999; Munro 2007.
- 27 なお、このときロゾライティス側の選挙スタッフの中に、後の大統領アダムクスがいた アダムクス・村田訳 2002。
- 28 リトアニア北西部の24番選挙区（シャウレイ選挙区）から、南東部69番選挙区（ズーキヤ選挙区）への変更。なおこの「国替」はリトアニアにおける歴史・文化的境界線を越境する。
- 29 EIU 1998, p7. Duvold and Jurkynas 2004によれば、他にも様々なアクターが、価値観政治をおこなうランズベルギスから離反しつつあったとされる。
- 30 とはいえ、米国亡命時代に米国共和党員であったことは有名である。
- 31 Fitzmaurice 2003.
- 32 Jeffries 2004. ヴァグノリウス批判が行われる前に書かれたアダムクスの回顧録を見ると、90年代初頭から両者は知己であったようだが、米国亡命リトアニア人コミュニティによるヴァグノリウス首相就任記念晩餐会への出席約束を反故にされたことへの言及にページを割いており、少なくともこのころからアダムクスはヴァグノリウスに対して好意的な感覚を持っていなかったことが見受けられる。アダムクス・村田訳2002
- 33 Jeffries 2004; FH-NiT 2002.
- 34 この政権で中道同盟は連立から去っている。キリスト教民主党も正式な連立協定を破棄しているが、関係は残り続けたためデファクトには連立を継続した。
- 35 自由同盟と訳されうる政党はリトアニア3つあるが、本稿においてこれは Lietuvos Liberalų Sąjunga (LLS: Liberal Union of Lithuania) のことである。ほかに Lietuvos Laisvės Lyga (Freedom League of Lithuania), Lietuvos Laisvės Sąjunga (Freedom Union of Lithuania) が、字義上「リトアニア自由同盟」と訳しうる。特に Laisves lyga については、独立運動時期に一定の存在感を持っていた民族主義派グループだったため、本稿でいう自由同盟が台頭する以前に邦語で書かれた資料などでは、Laisves Lyga に「自由同盟」の訳語があてられていることがある。ただし、近年では LLS に対して自由同盟の訳語があてられる。Liberalus と Laisve については、どちらも日本語では「自由」が定訳となるが、本稿では便宜上後者について「解放」の訳語をあてる。本稿の脚注21番も参照のこと。
- 36 畑中・チェバイティス2006, p230.
- 37 Fitzmaurice 2003; Bugajski 2002.
- 38 EIU 2000 p8, Ramonaitė 2006.
- 39 LSDP 公式ホームページ「Apie Partiją - LSDP Istorija」より。http://www.lsdp.lt/index.php/apie-partija/lsdp-istorija: (2009年10月6日接続確認)
- 40 Linkiene 2004.
- 41 EIU 報告では6人とされているが、筆者がリトアニア国会のホームページにおいて関係各議員の経歴を見た限り、脱退時のメンバーは5人である。ただしその後1人の合流が確認できる。
- 42 Fitzmaurice 2003.
- 43 ただしこの際、LCS のオゾラスは、議席を減らしてしまったことの責をとって党首の座を退いている。
- 44 EIU 2000.
- 45 Fitzmaurice 2003.
- 46 Piasecka 2002, Fitzmaurice 2003.
- 47 政党名の継続性から、社会民主党が民主労働党を吸収したかのような印象があるが、これは妥当ではない。現在の社会民主党ホームページには旧 LSDP と旧民主労働党双方の歴史が記述されており、また初代党首ブラザウスカス、次代党首キルキラスとともに旧民主労働党系の人物であった。合併前の議席差は民労党42対社民党7、党員数差は民労党8300対社民党4000であったように (Krupavičius and Žvaliauskas 2003), 社会民主党優位の吸収とはとても言えず、むしろ民主労働党が社民党の名を冠したといってもよい状況であった。
- 48 EIU 2001.
- 49 Ramonaite 2006.
- 50 EIU 2006.
- 51 Duvold and Jurkynas 2004.
- 52 EIU 2004.
- 53 Jurkynas 2005; Krupavicius 2005; EIU 2004.
- 54 EIU 2003.
- 55 Krupavicius 2005.
- 56 EIU 2005.
- 57 一連の顛末については krupavicius 2006.
- 58 Krupavicius 2007; FH-NiT 2007.
- 59 Krupavicius 2007.
- 60 FH-NiT 2007.
- 61 Krupavicius 2008.
- 62 *ibid.*
- 63 *ibid.*
- 64 Krupavicius 2008, FH-NiT 2008.
- 65 FH-NiT 2009.
- 66 *ibid.*
- 67 Jurkynas 2009.
- 68 Duvold and Jurkynas 2004などは、近年、個人に頼らない投票が現れつつあるとしているが、そのようなスタンスの論者でさえ、カリスマ的個人が政党政治の主要

ファクターであることを認めている。

69 とはいえ彼女は09年に党首の座を退いている。

~~~~~

[参考資料]

〈文献・文書〉

- Adamkus 村田訳2002:** Adamkus, Vardas, *Likimo Vardas - Lietuva: Apie laiką, quyklius, žmones*, Santara, 1997. (村田郁夫訳, ヴェルダス・アダムクス『リトアニア：わが運命』, 未知谷, 2002年.)
- Bugajski 2002:** Bugajski, Janusz, *Political Parties of Eastern Europe: A Guide to Politics in the Post-Communist Era*, M.E.Sharpe, 2002.
- Clartk et al. 1999:** Clark Terry D., Stacy J. Holscher and Lisa A. Hyland, "The LDLP Faction in teh Lithuanian Seimas, 1992-1996," *Nationalities Papers*, vol.27, no.2, 1999, 227-246.
- Duvold and Jurkynas 2004:** Duvold, Kjetil and Mindaugas Jurkynas, "Lithuania," Berglund, Sten, Joakim Ekman and Frank H. Aarebrot eds., *The Handbook of Political Change in Eastern Europe 2nd Edition*, Edward Elgar, 2004.
- Ferrara and Herron 2005:** Ferrara F and ES Herron, "Going It Alone? Strategic Entry under Mixed Electoral Rules," *American Journal of Political Science*, vol.49, no.1, 2005, 16-31.
- Fitzmaurice 2003:** Fitzmaurice, John, "Parliamentary Elections in Lithuania, October 2000," *Electoral Studies*, vol.22, 2003, 153-193.
- Grzymala-Busse 2002:** Grzymala-Busse, Anna M., *Redeeming the Communist Past: The Regeneration of Communist Successor Parties in East Central Europe after 1989*, Cambridge University Press, 2002.
- Grzymala-Busse 2007:** Grzymala-Busse, Anna M., *Rebuilding Leviathan: Party Competition and State Exploitation in Post-Communist Democracies*, Cambridge University Press, 2007.
- Hatanaka and Čepaitis (畑中・チェバイティス) 2006:** 畑中幸子, ヴィルギリウス・ユオザス・チェバイティス, 『リトアニア：民族の苦悩と栄光』, 中央公論新社, 2006年.
- Ishiyama 2001:** Ishiyama, John T., "Sickles into Roses: The Successor Parties and democratic Consolidation in Post-Communist Politics," in Paul G. Lewis eds., *Party Development and Democratic Change in Post-Communism Europe: The First Decade*, Frank Cass, 2001, 32-54.
- Jeffries 2004:** Jeffries, Ian, *The Countries of the Former Soviet Union at the Turn of the Twenty-first Century: the Baltic and European States in Transision*, Routledge, 2004.
- Jurkynas 2003:** Jurkynas, Mindaugas, "Political and Social Conflicts in Lithuania: Searching for the Left/Right Dimension and Cleavages," *The Baltic Sea Area Studies*, no.10, Gdansk/Berlin, Wydawnictwo Uniwersitetu Gdanskiego/Nord-europa Institut der Humboldt-Universitat zu Berline, 2003.
- Jurkynas 2004:** Jurkynas, Mindaugas, "Emerging Cleavages in New Democracies: The Case of Lithuania," *Journal of Baltic Studies*, vol.35, no.3, 2004, 278-296.
- Jurkynas 2005:** Jurkynas, Mindaugas, "The 2004 Presidential and Parliamentary Elections in Lithuania," *Electoral Studies*, vol.24, 2005, 770-777.
- Jurkynas and Ramonaitė 2007:** Jurkynas, Mindaugas and Ainė Ramonaitė, "Divergent Perceptions of Political Conflict in Lithuania," in Mai-Brith Schartau, Sten Berglund and Bernd Henningsen eds., *Political Culuture: Values and Identities in the Baltic Sea Region*, Berliner Wissenschafts-Verlag, 2007, 183-204.
- Kitschelt et al. 1999:** Kitschelt, Herbert, Zdenka Mansfeldova, Radoslaw Markowski, Gabor Toka eds., *Post-communist Party Systems: Competition, Representation, and Inter-party Cooperation*, Cambridge University Press, 1999.
- Kitschelt 2000:** Kitschelt, Herbert, "Linkages between Citizens and Politicians in Democratic Politics," *Comparative Political Studies*, vol.33, no.6, 2000, 845-879.
- Krickus 1997a:** Krickus, Richard J. "Democratization in Lithuania," in Karen Dawisha and Bruce Parrott eds., *The Consolidation of Democracy in East-Central Europe*, Cambridge Univeritisy Press, 1997, 245-289.
- Krickus 1997b:** Krickus, Richard J., *Showdown: The Lithuanian Rebellion and the Breakup of the Soviet Empire*, Brassey's, 1997.
- Krupavičius 1998:** Krupavičius, Algis, "The Post-communist Transition and Institutionalization of Lithuania's Parties," *Political Studies*, vol.46, 1998, 465-491.
- Krupavičius 2005:** Krupavičius, Algis, "Lithuania," *European Journal of Political Research*, vol.44, 2005, 1086-1101.
- Krupavičius 2006:** Krupavičius, Algis, "Lithuania," *European Journal of Political Research*, vol.45, 2006, 1166-1181.
- Krupavičius 2007:** Krupavičius, Algis, "Lithuania," *European Journal of Political Research*, vol.46, 2007, 1019-1031.

- Krupavičius 2008:** Krupavičius, Algis, “Lithuania,” *European Journal of Political Research*, vol.47, 2008, 1048-1059.
- Krupavičius and Žvaliauskas 2003:** Krupavičius, Algis and Giedrius Žvaliauskas, “Political Parties and Elite Recruitment in Lithuania,” in Sten Berglund and Kjetil Duvold eds., *Baltic Democracy at the Crossroads: An Elite Perspective*, 2003.
- Lane 2002:** Lane, Thomas, *Lithuania: Stepping Westward*, Routledge, 2002.
- Lewis 2000:** Lewis, Paul G., *Political Parties in Post-Communist European Europe*, Routledge, 2000.
- Lieven 1994:** Lieven, Anatol, *The Baltic Revolution: Estonia, Latvia, Lithuania, and the Path to Independent (2<sup>nd</sup> edition)*, New Haven and London, Yale University Press, 1994.
- Linkiene 2004:** Linkiene, Violeta, “Socialdemokratijos Keliai ir Klystkeliai: Penkiolikos metu- istorija (1989-2004),” Speech of Lithuanian Social Democratic Union 5<sup>th</sup> Congress, 14-Aug-2004, Vilnius.
- Matsuzato 2002:** Matsuzato, Kimitaka, The Last Bastion of Unitarism? Local Institutions, Party Politics, and Ramifications of EU Accession in Lithuania, *Eurasian Geography and Economics*, vol.43, no.5, 383-410, 2002.
- Meleshevich 2007:** Meleshevich, Andrey A., *Party Systems in Post-Soviet Countries: A Comparative Study of Political Institutionalization in the Baltic States, Russia and Ukraine*, Palgrave Macmillan, 2007.
- Muller-Rommel et al. 2004:** Muller-Rommel, Ferdinand, Katja Fettelschoss and Philipp Harfst, “Party Government in Central Eastern European Democracies: A Data Collection (1990-2003),” *European Journal of Political Research*, vol.43, 2004, 869-893.
- Munro 2007:** Munro, Neil “Composition of Lithuanian Government,” Centre for the Study of Public Policy University of Aberdeen, *Baltic Voices*, 27-Jul-2007, available at <http://www.balticvoices.org/index.php>.
- Nakai (中井) 2008:** 中井遼, 「バルト諸国における政党システムとロシア系住民問題一類似の構造・類似の制度・異なる帰結」, 伊東孝之編『せめぎあう構造と制度: 体制変動の諸相』, 正文社, 2008年, 183-240.
- Nakai (中井) 2009:** 中井遼, 「少数民族政党の議席獲得の成否: アクター中心アプローチによる理論的再検討」, 『早稲田政治公法研究』, 90号, 2009年, 31-44.
- Nakai 2009:** Nakai, Ryo, “The Success and Failure of Ethnic Parties” paper presented at International Political Science Association 21st World Congress, 12-Jul-2009, Santiago, Chile.
- Novagrockienė 2001:** Novagrockienė, Juratė, The Development and Consolidation of the Lithuanian Political Party System, *Journal of Baltic Studies*, vol.32, no.2, 2001, 141-155.
- Onaka 2009:** 大中真, 「バルト諸国」, 網谷他編, 『ヨーロッパのデモクラシー』, ナカニシヤ出版, 2009年, 392-398.
- Pettai and Kreuzer 1999:** Pettai, Vello and Marcus Kreuzer, “Party Politics in the Baltic States: Social Bases and Institutional Context,” *East European Politics and Societies*, vol.13, no.1, 1999, 148-189.
- Przeworski and Teune 1970:** Przeworski, Adam and Henry Teune, *The Logic of Comparative Social Inquiry*, Krieger Publishing Company, 1970.
- Przeworski and Teune 1970:** Przeworski, Adam and Henry Teune, *The Logic of Comparative Social Inquiry*, Krieger Publishing Company, 1970.
- Ramonaitė 2006:** Ramonaitė, Ainė, “The Development of the Lithuanian Party System: From Stability to Perturbation,” in Susane Jungerstam-Mulders eds., *Post-communist EU Member States: Parties and Party Systems*, Ashgate, 2006.
- Rose and Munro 2003:** Rose, Richard and Neil Munro, *Elections and Parties in New European Democracies*, Washington D.C., CQ Press, 2003.
- Sato (佐藤) 2007:** 佐藤圭史 「ソ連邦末期における民族問題のマトリョーシュカ構造分析: リトアニア・ポーランド人問題のケーススタディ」, 『スラヴ研究』, 54号, 2007年, 101-130.
- Sengoku (仙石) 2008:** 仙石学, 「EU-8の社会協議システム: 政党政治の視点からの分析」, 『大原社会問題研究所雑誌』, 595号, 2008年, 48-63.
- Sengoku 2009:** Sengoku, Manabu, “Welfare state institutions and welfare politics in Central and Eastern Europe: the political background to institutional diversity” in Tadayuki Hayashi and Atsushi Ogushi eds., *Post-Communist Transformations: The Countries of Central and Eastern Europe and Russia in Comparative Perspective (Slavic Eurasian Studies, No.21)*, Hokkaido University Slavic Research Centre, 2009, 145-178.
- Sikk 2005:** Sikk, Alan, “How Unstable? Volatility and the Genuinely New Parties in Eastern Europe,” *European Journal of Political Research*, vol.44, 2005, 391-412.
- Snyder 2003:** Snyder, Timothy, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine Lithuania, Belarus*, 1569-1999, Yela University Press, 2003.
- Vogt 2003:** Vogt, Henri, “Coalition-Building and Consensus: Comparative Observation of the Three

中井 遼：現代リトアニアにおける政党政治

*Baltic States,* in Sten Berglund and Kjetil Duwold eds., *Baltic Democracy at the Crossroads: An Elite Perspective*, 2003, Hoyskole Forlaget, 81-104.

2002-2009)

〈公的機関等 web サイト〉

**Whitefield 2002:** Whitefield, Stephen, "Political Cleavages and Post-communist Politics," *Annual Reviews of Political Science*, vol.5, 2002, 181-200.

**LRS:** Lietuvos Respublikos Seimas (リトアニア共和国セイマス)

<http://www.lrs.lt/>

**Yoshino (吉野) 2000:** 吉野悦雄, 『複数民族社会の微視的制度分析：リトアニアにおけるミクロストーリーア研究』, 北海道大学図書刊行会, 2000年.

**LRV:** Lietuvos Respublikos Vyriausybė (リトアニア共和国政府(首相府))

(2009-) <http://www.lrv.lt/>

(-2009) <http://old.lrv.lt/main.php>

〈定期刊行物〉

**EIU:** Economist Intelligence Unit, *Country Profile* series. (from 1998-2009)

**VRK:** Lietuvos Respublikos Vyriausioji Rinkimų Komisija (リトアニア共和国中央選挙委員会)

(2004-) <http://www.vrk.lt/>

(-2004) <http://www3.lrs.lt/rinkimai/>

**FH-NiT:** Freedom House, *Nation in Transit* series. (from

中井 遼 (なかい りょう, 1983年生)

所 属 早稲田大学政治学研究科博士後期課程

最終学歴 早稲田大学政治学研究科修士課程

所属学会 日本比較政治学会, ロシア東欧学会, International Political Science Association, Association for the Advancement of Baltic Studies

研究分野 比較政治学, 現代中東欧政治研究, 政党システム論

主要著作 「バルト諸国における政党 システムとロシア系住民問題：類似の構造・類似の制度・異なる帰結」伊東孝之編『せめぎあう構造と制度：体制変動の諸相』, (正文社, 2008年) 183-240頁。

「少数民族政党の議席獲得の成否：アクター中心アプローチによる理論的再検討」『早稲田政治公法研究』第90号 (2009年), 31-44頁。

「リトアニア政党・選挙データ」ポスト社会主義諸国の政党・選挙データベース作成研究会編『ポスト社会主義国政党・選挙ハンドブックⅡ』(京都大学地域研究統合情報センター, 2009年), 23-41頁。